伝統的祭事における担い手多様化に関する住民意見の規定要因

—重要無形民俗文化財・熊甲二十日祭を事例として—

Regulatory Factors of the View of the Local Residents on the Diversification of Participant in Traditional Festivals:

Case Study of the Kumakabuto Hatsuka Matsuri of an Important Intangible Folk Cultural Asset

山下 良平* 岩佐 拓弥*

Ryohei YAMASHITA*, Takuya IWASA*

(*石川県立大学生物資源環境学部)

(*Faculty of Bio-resources and Environmental Sciences, Ishikawa Prefectural University)

I 研究背景と目的

1 伝統的な祭事の継承に関する議論

日本の多くの農山漁村地域には、生業としての農林漁業の繁栄と豊作祈願、収穫物への感謝という意味が込められた伝統的な祭事が数多く存在する。そして、それらの祭事は確固たる方法によって継承されてきた経緯を有する。例えば、石川県能登地域の農文化は、日本で初めて世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems：GIAHS）^{注1)}に認定されたが、その認定内容の1つとして、「長い歴史の中で育まれた農耕にまつわる文化・祭礼」が明記されている²⁾。このことから、農山漁村地域で継承される伝統的な祭事は、保全すべき重要な価値として国際的に認められていることが理解できる。しかしながら、近年は過疎化・高齢化の進行により、伝統に対して忠実な旧態の継承方法が限界を迎えている状況が散見される。

折しも今日、地方創生戦略や国土形成計画のもとで、学生を含む若年層による都市と農山村の人材対流が具体的な項目として明記され、地方部の地域経営への関与^{注2)}が推進されている。その活力を取り入れることで、旧態の仕組みでは継承が困難な祭事における、新たな担い手の一部として期待されている例が多数ある。しかしながら、外部の人材が祭事などの地域活動に関与する運動が全て円滑に進んでいる訳ではなく、受け入れる地元側の意識も多様である。

これに対して、その多様な住民の心理について、定量的に把握されることはまれである。その背景には、基礎データとして肯定的（協力的）な意見の収集が比較的容易であることにに対して、否定的（非協力的）な意見を網羅的に集計することが容易ではないことがある。その結果、地域外からの参加者に対する好感に偏った情報が流

布し、地域外部者との円滑な連携・協働の過程に見られる問題に関する理解が阻害されるという影響が考えられる。

2 連携の注意点

元来、地域の生活と密接に関わる祭事の運営方法は多様であり、コミュニティの運営方式⁴⁾や農業基盤の管理方式の変化⁵⁾などに適応していく実例はある。しかし、祭事の伝統が堅固であるほど地域外部者の拙速な関与には注意を要し、協働すべき対象や地域への入り方には慎重を期する必要がある。外部人材の祭事への参加自体は、以前から各地で見られたものである。そのうえで、外部人材と良好な関係を構築しながら協働で祭り経営を実現してきた事例が示す、慎重に関与する領域（役割）を見定めながら⁶⁾、時間をかけてキーパーソンを特定し、地域の一員として同化していくというプロセス⁷⁾が重要であるともいえる。その道筋をより確実なものにするために、地域社会の性質や外部人材の祭事参加に対する地元住民の意向を俯瞰的に捉え、多様な意向に関する認識を深めることは、重要な学術的貢献である。

受け入れ側の地元住民の認識を対象とした近年の成果を散見すると、政田ら⁸⁾は祭事でのケガのリスクが地域外部者との連携を阻害していると指摘し、堂下⁹⁾、卯田・阿部¹⁰⁾では、祭事の活性化に関する地元側からの提案が資料として提示されている。これらの研究は、祭事に参加する地域外部者側の動機の記述が主な論点であり、受け入れ地域側の肯定的意見と否定的意見の実態について、厳密な分析対象とされていない。そこで、肯定的あるいは否定的な意見を構成する個人属性などの要因を解明するため、より網羅的な意見収集に基づく集計的な分析が望まれている。

3 研究目的と作業仮説

本研究では、地域外の若年層の集団的な参加に関して、現状の有り様が客観的に把握され、その是非が評価されていない現状を問題として捉える。この問題に対して、受け入れる地域側の賛否の意見を形成する要因と、それら寄与率を定量化することによって接近する。より詳細には、本事例研究では、旧態において祭事の中核を担ってきた層だけではなく、その周囲にあるサポート層、祭事への参加自体に日和見である地域住民を含む地域全体を調査対象とする。そして、外部人材が農山村地域の諸活動に主体的に参画する際に踏まえるべき注意点として、地元側の受容やその特徴を導出することを目的とする。その目的に向けた事例分析として、地域外の若年層による祭事参加に対する意見の規定要因を解明することを課題とする。

研究に際し、地域外部の若年層が農山村地域の祭事などの担い手として関与することが「推進すべき課題」と位置づけられる今日において、なお上記のように既往研究で協働・連携に否定的な見解が論じられにくい状況から着想を得た作業仮説を構築した。つまり、賛否の意見の規定要因としては、性別や年代などの個人属性、あるいは個々人の思考を間接的に規定する生活様式や生活環境と比較して、外部者が参加しても運営に貢献しない、あるいはそもそも参加すべきではないという保守的な思考が依然として強く作用しているという仮説を検証する。外部人材に対する期待が著しく低調であるならば、拙速な連携構築には留意する必要がある、祭事運営の継承に関する計画づくり及び実践の方策は慎重に検討されるべきものと判断される。

なお、「地域外の人材」が含む内容は多様であり、実際に地方の祭事に参加する際のアクセス条件も異なる。これらの諸要素を混同することを避けるために、本研究では、同一県内を中心とする大学生に限定して、彼・彼女らを外部人材と定義する。

II 対象地域と調査方法

1 対象地域の概要

対象地域として、石川県七尾市で行われる熊甲二十日祭（以下、本祭と略記）の継承を取り上げる。本事例は、祭事を構成する関係集落のごく一部で大学生の参加が萌芽していること、また関係集落のうち一部が人口減少により参加不可能となり、別の集落でも参加の継続が困難な状況にあること、非公式ながら複数の集落でこれまで外部との連携に関する協議が行われてきた経緯があることなどから、本研究の対象として適格であると判断した。

図1 本祭に参加する集落の位置

Fig. 1 Location of the participating settlements to this festival

注1)：旧中島村7集落は地理情報や公式統計上1単位として集計されるため、右の集落境界では16分割となっている。

図2 本祭の主な役回り (撮影: 石川県立大学教員・学生)

Photo 1 Main roles of this festival (Photo by students and teaching staff of Ishikawa prefectural university)

本祭は、石川県七尾市の北端に位置する久麻加夫都阿良加志比古神社（以下、本社と表記）で開催され、その周辺に位置する旧村の熊木村6集落（6神社）、中島村7集落（4神社）、西岸村8集落（8神社）、豊川村1集落（1神社）の22集落19神社（以下、末社と表記）が参加する（図1参照）。本祭は、ムラを挙げて豊作豊漁の喜びを表現し、他に例のない異国情緒で地域色が強いことが評価され、1981年1月に文化財保護法の規定により、国指定重要無形民俗文化財に指定された¹¹⁾。本祭に関する神事及び祭事は、記録が残るものを辿るならば、江戸時代初期には既に現在の原型が見られる。一連の行事は9月初旬の神事に始まり、毎年9月20日の本祭が執り行われる。全国的に、担い手の確保や参加者数を考慮して、週末に祭事を開催する事例が多い中、本祭は非常事態を除いて、伝統的に日付を動かさずに開催している¹²⁾。また同様に、終戦直後の非常事態を除いては地区住民の男性のみで行われ¹³⁾、祭事の「体」に関して

も伝統を堅持してきた。

2 地元の限界と地元大学生の位置づけ

(1) 地元定住者のみによる運営の限界

本祭の主な役回りは、概ね図2に示す通りであり、神社に属する集落単位でこれらの役に対して担当者を割り当てる。全てを揃える場合は、可能な限り人数を節減したとしても約50～60人は必要であり、過疎化が進行した集落では必要人員の確保が困難な状況にある。国勢調査に基づく2015年までの20年間で、当該地域の関係集落の人口減少率の平均は約30%であり、その大半は若年層であることから、要員確保は継続した課題である。現在、既に2つの集落が人数不足により完全に参加できず、2～3の集落が、祭事の中心的な存在である杵旗を出すことができない状況にある。そして、数集落が今後数年の間に、全ての役回りを揃えることが困難になることが予想されている。

これまでの対応としては、農繁期の労働力不足を補う同一町内の（本祭対象外の）集落との繋がりに基づいて、祭の要員不足を補い合う慣行的な対策が採られてきた^{注5)}。特に、杵旗を担ぐ要員が足りない小さな集落では、集落住民個人の交友関係によるごく数人の補助的参加以外は、長らくこれらの慣行的な相互扶助によって基本的な要員を確保してきた。しかしながら、周辺集落も同様に人口減少が進む中で、開催日が固定であるため、平日の場合は地元住民であっても参加は難しいことなどから、慣行的な方策による安定的な要員確保は既に困難となっている。

文化財の指定要件によって地元の男性のみの参加に限定されることはないが、伝統であるが故に、外部の団体と組織的に連携を図った複合的な担い手組織によって祭事を継承していくべきかについて、各集落あるいは本祭参加集落全体でのコンセンサスは存在しない^{注6)}。

(2) 地元大学生の関与とその位置づけ

本祭に関する一部の集落（ここでは便宜的に先行集落と表記）が、自集落の縮小の趨勢をいち早く察知し、他の集落に先んじて県内の大学との試験的な連携を進めた背景には、上記のような慣行的な互助の限界があることが分かっている¹²⁾。先行集落では、大学コンソーシアム石川による補助事業を契機として、2008年に石川県内の大学サークルの参加を試験的に受け入れ、継続的な連携を模索してきた。その間、地元自治体などのさまざまな支援事業に申請し、学生の用具費や滞在費の工面に苦心したが、当該大学サークルの他、被災地支援活動を行う関西地方の大学サークル構成員にも本祭への参加を呼びかけ、徐々に支援層を獲得し、現在に至る。現在もそ

れらの大学サークルの出身者有志が卒業後も私費で参加するなど、交流のきっかけとして機能している。ただし、同一県内以外からの参加に要する費用は、原則として参加する側が工面しており、これは他集落が仮に受け入れを検討した場合にも同様の条件であることが想定される。本稿でまず同一県内の大学生との連携を限定的に対象とした背景には、人数確保の面でも資金面の課題克服についても、現実性の高い集団であるという点がある。

なお、各集落とも祭事の人材確保が喫緊の課題であることは共通しているが、先行集落を追随する具体的な動向はなく、現状では先行集落内でさえも、とるべき担い手多様化の方向性について共通認識が形成されていない。

3 調査方法

これまでの論点整理を踏まえて、本祭が実施される地域全域を調査範囲として、全世帯対象のアンケート調査を実施し、当該地域住民の意向を可能な限り収集する。そして、事例地域の実態把握を念頭に置き、十分な回収票が得られたことを確認した後に、回答者の個人差や地域差を考慮して統計分析を行う。より具体的な手順として、まず「どのような個人属性で」、「どのような日常生活を送り」、「居住する集落や周辺のコミュニティに対してどのような考え方を有し」、「本祭への外部人材参加の客観的効果をどのように認知している」地域住民が、「具体的に本祭において外部人材と連携すること」をどう判断するかを抽出する。その結果から、肯定的に捉える層と否定的に捉える層について、地域の特徴（集落差）や個人属性の観点から規定要因を定量的に明らかにする。

III 分析の枠組み

1 分析の流れ

前述の作業仮説の検証を基本的な骨格として、アンケート調査表の設計に、以下のように研究を進めた。

本祭への外部人材の参加に対する許容度は、個々人が持つ協働や伝統保守に対する根本的意識に加えて、自集落の祭事運営状況がどの程度厳しいと認識しているかによると考えられる。そこで、本祭において自集落の役割運営の要員不足が生じた際に望ましい対応として、現地での予備調査を踏まえていくつかの選択肢を提示し、その回答から個々人の志向を簡潔に把握するものとした。

アンケート調査では、便宜的に優先順位を3番目まで設け、「学生に頼る」という選択肢が優先順位1～3までに入る場合と入らない場合に大別し、そのダミー変数を目的変数とする。この値をもって、地域外部の人材、

表1 アンケート調査における質問項目及び選択肢（分析に用いた項目のみ表記）

Table 1 Question items and options in the questionnaire survey (Only items used for analysis)

質問内容	選択肢	文中の表との対応
自身の年齢区分として該当するものを選択して下さい	19歳以下, 20～29歳, 30～39歳, 40～49歳, 50～59歳, 60～69歳, 70歳以上,	表2
自身の性別を選択して下さい	男性, 女性	表2
自身の居住集落を選択して下さい	実際の22集落名を提示	表2～7
ここ1～2週間で誰と会話しましたか（複数選択）	家族, 親戚, 近所の人, 職場の同僚, 役所職員, 訪問販売や訪問介護職員, その他の人, 誰とも話していない	表3
ここ1～2週間の外出範囲で最も遠いのはどの範囲ですか	自宅～集落内, ～七尾市内, ～石川県内, 石川県外～	表4
普段の生活の中で困ったときや悩んでいる時に, 集落の中に相談できる相手はいますか	全くいない, 身内もしくは身内以外のいずれか片方にいる, 身内にも身内以外にも両方いる。	表5
寄合や共同作業の掃除などの集落内の集まりにどの程度参加していますか	1～2回/1ヶ月, 1～2回/3ヶ月, 1～2回/1年, 1～2回/数年・それ以下	表5
在所内で自身と違う世代の人達と普段話す機会はありますか	とても頻繁にある, たまにある, ほとんどない・全くない	表5
役所の人や地域の役員の人たちに, 地域の問題や困っていることを伝えたり相談しやすい雰囲気はありますか	とても話しやすい, あまり話しやすい雰囲気ではない, 全く話しやすい雰囲気ではない。	表5
ここ数年でみて, 自身は熊甲祭に人足や見学のためにどの程度参加していますか	毎年必ず参加する, 都合がつけば参加する, あまり参加しない・全く参加していない	表6
自身の集落で熊甲祭の人足が不足してきた時には, どのような対応が望ましいと考えますか（上位3つ）	集落出身者への呼びかけ強化, 地縁者・血縁者への呼びかけ強化, 県内の大学生, ツアーによる一般募集, 女性の参加促進, その他, 誰も呼ばない（選択終了を意味する選択肢）	表2
熊甲祭に学生を団体で受け入れることで, 人足面でどのような効果があると思いますか	かなり助かり重宝する（だろう）, 多少助かるが大きな力ではない（だろう）, 余計手がかかり, いない方がいい	表6
もし自身の集落で熊甲祭に大学生を団体で受け入れる場合, 1年で行くまでなら寄付による支援ができますか	1,000円未満, 1,000円～3,000円未満, 3,000円～5,000円未満, 5,000～10,000円未満, 10,000円以上	表6

注1)：「人足」とは、地元の言葉で「祭りの参加要員」を意味する。

具体的にここでは学生が協働という形で参加することへの意見と仮定する。

そして、調査によって抽出した個人レベルの属性や意向、所在地の環境指標などの要因を説明変数として、目的変数（祭事への外部人材参加に対する意見）との関係性を統計的に評価する。これにより、生活環境や生活様式、祭事のあり方に関する志向・規範意識、あるいは集落特性がどの程度意見を規定しているかについて確認する。その結果から、祭事継承方法の変化の過程に見られる、肯定的・否定的な意見の形成要因を定量的に明らかにする。なお、地域差を説明する情報は多数考えられるが、特に本祭が農業の豊作への感謝に起源を持つこと、そして現在担い手不足であることを踏まえて、人口と耕作放棄地率のみを採用した^{注7)}。

用いる統計的分析法は、学生の受け入れを歓迎するという協働に肯定的な意見と、現状では受け入れないという否定的な意見の2値を規定する要因を探索するため、2項ロジスティック回帰分析とした^{注8)}。

2 調査内容

データ収集に用いたアンケート調査の内容及び選択肢を表1に示す。

説明変数となる影響要因として考慮する個人属性は、年代及び性別である。個人の日常生活様式については、日常的（調査では1～2週間と提示）な会話の相手、日

常的（同様に1～2週間と提示）な外出範囲である。居住集落や周囲のコミュニティとの接点や考え方については、集落内での困り事・悩み事の相談相手の有無、寄り合いなどへの参加頻度、日常的に自分と違う年代の住民との会話頻度、集落住民の日常的な生活様式の把握度合い、行政や地域コミュニティの役員に対する発言のしやすさ、である。

直接本祭に関する要因については、ここ数年での本祭への参加頻度、仮に学生が本祭に参加する場合、役回りの分担者としてその技量がどの程度有意義かについての主観的な想定、仮に学生を受け入れたとした場合に寄付可能な金額（1年単位の寄付額）、である。

アンケート調査は、本祭に参加する対象集落全戸に調査票を1票ずつ、全1,200通を郵送した（2016年10月19日）。そして、同年12月末を回収期日として回収した結果、607の返送票を得た（回収率：50.6%）。なお、自治体ウェブサイトで公開される2016年11月時点の各集落の世帯数を参照し、集落毎の回収率を算出したところ、35.3～70.0%となった。

IV 調査結果

1 個人属性と継承方法の変化に対する意見

分析に用いる設問に空欄がない回答者を抽出した結果、有効回答票数は529となった。それらを属性毎に区

表2 集落毎にみた回答者の個人属性及び祭事の継承方法の変化に対する意見

Table 2 Individual attributes of respondents and views toward changing of the succession method of the festival for each settlement

集落 ID	有効回数 合計	男性人数（年代別内訳）					女性人数（年代別内訳）					意見	
			～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳～		～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳～	肯定的	否定的
A	29	20	2	3	11	4	9	3	1	1	4	6	23
B	13	8	0	2	0	6	5	0	3	1	1	9	4
C	23	17	4	4	5	4	6	3	0	2	1	13	10
D	45	29	8	7	9	5	16	5	2	5	4	27	18
E	12	12	2	1	5	4	0	0	0	0	0	5	7
F	12	6	2	0	1	3	6	4	1	1	0	6	6
G	16	10	1	1	7	1	6	1	1	3	1	6	10
H	22	19	1	5	7	6	3	0	1	1	1	15	7
I	11	5	2	1	1	1	6	1	1	3	1	5	6
J	23	18	4	8	4	2	5	1	0	3	1	15	8
K	43	27	6	6	10	5	16	4	6	4	2	23	20
L	98	60	18	8	19	15	38	12	5	11	10	43	55
M	10	7	3	1	2	1	3	0	1	1	1	7	3
N	33	18	3	2	8	5	15	3	4	3	5	14	19
O	12	10	2	1	5	2	2	0	0	1	1	7	5
P	9	6	2	1	3	0	3	0	0	1	2	5	4
Q	21	13	3	2	4	4	8	2	1	2	3	10	11
R	14	10	1	1	3	5	4	1	0	2	1	6	8
S	37	21	2	3	6	10	16	6	2	4	4	16	21
T	46	27	7	6	9	5	19	5	2	7	5	18	28
合計	529	343	73	63	119	88	186	51	31	56	48	256	273

注1)：表1で提示した年代階層で、30歳代以下が他の選択肢と比較して少なかったため、49歳以下で一括した。

分して、かつ外部主体を組み込んだ継承方法への変化に対する意見の分布を集落毎に整理した結果が表2である。集計に際して、集落IDでA～Tまでは、2016年現在で本祭に参加する実際の個別集落であり、既に数年前あるいは数十年前から集落単独での参加を取りやめている2集落と、集落名が無回答であった票は割愛した。

本稿の統計分析において、3つ以上の選択肢がある設問への回答を反映するダミー変数は、各選択肢においてそれが選択された場合＝1、されなかった場合＝0とした。性別の場合は、男性が1、女性が0のダミー変数である。

2 説明変数を決定する情報

回答者個々人の日常生活における会話対象の数は、表1に示す選択肢から複数選択可能として算出した（表3参照）。また、日常の生活圏を示す行動範囲は表4に示す結果となった。統計処理では、会話対象の数は比例尺度の量的変数とした。さらに、居住集落や周囲のコミュニティとの接触頻度や、コミュニティの性質に対する認識については表5のように整理される。最後に、ここ数年でみた本祭への参加実態と、学生が参加することを仮定した場合の技量の主観的評価、そしてその場合に支援可能な寄付金額について、表6に示すような結果となった。

以上のデータ収集の結果、集落単位でみた被選択数がゼロの選択肢が多くなった「年代（39歳以下）」と、「支

援可能な寄付金額（10,000円以上）」は、独立したダミー変数としての有用性が低いため、それぞれ「49歳以下」と「5,000円～10,000円」に統合した。したがって。個人対象のアンケート調査の回答に基づき、分析に用いる変数（ダミー変数含む）は計33となった。

個人に帰属する要因の他に、平成27年度国勢調査結果や2010年度世界農林業センサスを根拠として、集落の人口、耕作放棄地率の2つを各種公式統計から抽出し、各個人が居住する集落の数値を変数として付与した（表7参照）。

3 分析に投入する変数選択

まず、上記のような地域レベルの変数を考慮した統計分析として、マルチレベルモデリングの援用が考えられるため、次章以降の分析に先立って予備的に適用を試みた。IBM SPSS Ver.25を用いて計算した結果、級内相関係数が0.02程度（Design Effect < 1.47）であり、肯定的・否定的な意見に対する変量効果が十分に低いとの判断から適用を見送った。

分析に先立って全35（アンケート調査に基づく変数33＋集落特性に基づく変数2）の説明変数について、便宜的にspearmanの順位相関係数0.6以上を基準として多重共線性を確認した。この基準を満たす相関関係にある組み合わせは、以下の5つである。

①「日常的な会話対象数×日常的な行動範囲ダミー：石川県外～」(r = -.88)

表3 日常生活における会話対象の度数分布

Table 3 The frequency distribution of daily conversation partner

集落 ID	0 項目	1 項目	2 項目	3 項目	4 項目	5 項目～
A	0	5	4	10	10	3
B	0	1	2	7	3	1
C	0	0	3	9	11	5
D	0	7	7	12	19	10
E	0	1	3	1	7	1
F	0	2	4	0	6	1
G	0	2	1	4	9	4
H	0	4	3	10	5	3
I	1	2	3	1	4	0
J	0	1	3	7	12	2
K	0	3	7	18	15	4
L	1	10	27	34	26	3
M	0	0	2	6	2	0
N	0	5	5	11	12	7
O	0	2	3	4	3	0
P	0	0	3	5	1	1
Q	0	1	6	7	7	2
R	1	2	0	4	7	2
S	0	6	3	11	17	6
T	0	6	7	17	16	5
合計	3	63	96	178	192	60

注1)：0項目は「誰とも話していない」を選択した人数。

注2)：表記上5項目以上を一括したが、分析では選択数をそのまま変数化している。

表4 日常生活における行動範囲の度数分布

Table 4 The frequency distribution of a range of daily activities

集落 ID	家～集落内	～七尾市内	～石川県内	石川県外～
A	0	15	9	6
B	0	6	3	7
C	0	6	13	4
D	1	13	16	4
E	2	4	4	15
F	1	3	5	2
G	2	4	8	3
H	0	10	7	2
I	1	3	5	5
J	1	5	13	2
K	0	9	23	4
L	3	25	40	12
M	0	2	4	31
N	2	9	16	4
O	0	3	7	6
P	1	0	6	2
Q	1	6	12	2
R	2	3	7	2
S	0	14	16	3
T	1	11	27	6
合計	18	151	241	122

表5 居住集落や周囲のコミュニティとの接触頻度やそれに対する認識の度数分布

Table 5 The frequency distribution of a contact opportunity to the living in and surrounding communities and cognition for them

集落 ID	相談できる相手の有無			寄り合いなどへの参加頻度				異なる世代との会話頻度			相談・発言しやすさ		
	①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	①	②	③
A	1	12	16	2	7	18	2	7	20	2	8	14	7
B	0	6	7	6	4	1	2	3	8	2	8	3	2
C	0	8	15	7	8	6	2	10	11	2	8	12	3
D	2	20	23	16	21	3	5	12	23	10	12	23	10
E	0	8	4	1	3	7	1	1	10	1	6	5	1
F	0	4	8	2	5	3	2	3	8	1	2	6	4
G	0	7	9	7	6	2	1	5	11	0	4	6	6
H	1	10	11	5	13	2	2	6	14	2	6	10	6
I	1	4	6	3	3	3	2	2	5	4	1	3	7
J	1	8	14	6	11	5	1	3	17	3	9	8	6
K	1	16	26	8	12	18	5	12	24	7	8	22	13
L	13	40	45	10	19	56	13	20	59	19	19	44	35
M	1	1	8	0	5	4	1	3	4	3	4	4	2
N	2	10	21	3	13	16	1	7	23	3	11	9	13
O	1	4	7	3	4	5	0	4	6	2	4	5	3
P	1	2	6	2	2	2	3	4	4	1	4	2	3
Q	2	9	10	2	5	10	4	7	11	3	8	6	7
R	1	3	10	3	5	3	3	6	7	1	3	9	2
S	1	11	25	5	10	15	7	11	21	5	15	12	10
T	1	19	26	11	23	6	6	11	29	6	15	20	11
合計	30	202	297	102	179	185	63	137	315	77	155	223	151

注1)：相談相手の有無に関する選択肢は、①：全くいない、②：身内もしくは身内以外のいずれか片方にいる、③：身内にも身内以外にも両方いる。

注2)：寄り合い参加頻度に関する選択肢は、①：1～2回/1ヶ月、②：1～2回/3ヶ月、③：1～2回/1年、④：1～2回/数年・それ以下。

注3)：異なる世代との会話頻度に関する選択肢は、①：とても頻繁にある、②：たまにある、③：ほとんどない・全くない。

注4)：行政職員や地域自治組織役員に対する相談のしやすさに関する選択肢は、①：とても話しやすい、②：あまり話しやすい雰囲気ではない、③：全く話しやすい雰囲気ではない。

表6 本祭への参加頻度及び学生の参加を仮定した場合の評価の度数分布

Table 6 The frequency distribution of a frequency of own participation in the festival and evaluation when assuming students participate

集落 ID	本祭への参加頻度			技量に対する主観的評価			支援可能な寄付金額			
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	④
A	19	4	6	13	11	5	12	3	7	7
B	9	1	3	10	2	1	3	1	2	7
C	18	3	2	15	5	3	3	6	8	6
D	27	9	9	34	9	2	9	11	11	14
E	9	0	3	8	2	2	1	4	1	6
F	7	2	3	8	2	2	3	0	2	7
G	13	1	2	10	6	0	2	6	5	3
H	17	3	2	16	4	2	3	4	5	10
I	7	2	2	7	2	2	2	1	1	7
J	17	3	2	18	2	2	4	7	5	6
K	31	6	6	23	13	7	12	9	11	11
L	57	19	22	56	32	10	26	25	28	19
M	6	2	2	5	5	0	0	1	1	8
N	18	5	10	21	10	2	3	6	10	14
O	9	1	2	8	3	1	1	4	4	3
P	6	1	2	4	5	0	3	0	1	5
Q	10	6	5	12	8	1	5	2	4	10
R	9	2	3	6	4	4	2	2	3	7
S	22	7	7	23	9	4	12	8	7	9
T	32	5	8	29	9	7	10	10	12	13
合計	343	82	101	326	143	57	116	110	128	172

注1)：参加頻度に関する選択肢は、①：毎年必ず参加する、②：都合がつけば参加する、③：あまり参加しない・全く参加していない

注2)：学生の技術に対する主観的評価に関する選択肢は、①：かなり助かり重宝する（だろう）、②：多少助かるが大きな力ではない（だろう）、③：余計手がかかり、いない方がいい。

注3)：寄付金額に関する選択肢は、①：0～1,000円、②：1,000円～3,000円、③：3,000円～5,000円、④：5,000円以上。10,000円以上の選択数が少数であったため、5,000円～10,000円と統合した。

- ②「悩み事を相談できる相手ダミー：身内もしくは身内以外のいずれか片方にいる×悩み事を相談できる相手ダミー：身内にも身内以外にも両方いる」(r = -.89)
- ③「異世代との会話頻度ダミー：とても頻繁にある×異世代との会話頻度ダミー：たまにある」(r = -.72)
- ④「学生の技量の評価ダミー：とても助かり重宝するだろう×学生の技量の評価ダミー：多少助かるが大きな力ではない」(r = -.79)
- ⑤「本祭への参加頻度ダミー：毎年必ず参加する×本祭への参加頻度ダミー：あまり参加しない・全く参加していない」(r = -.67)

よって、多重共線性の影響に対処するため、まず上記の各々の組み合わせの後者を除き、同一質問内で全ての選択肢（カテゴリー）のダミー変数が残っているものについては、度数が最大の選択肢を参照カテゴリーとして計算から除去した結果、26変数が分析に用いられた。なお、説明変数の総数26に対してサンプル数が529であることから、強制投入法によりモデルを決定した^{注9)}。

V 分析結果と考察

ロジスティック回帰モデルの推定結果を表8に示

表7 集落特性を示す変数

Table 7 Variables on a characteristic of settlements

集落ID	人口	耕作放棄地率
A	175	18.7
B	47	5.0
C	175	14.6
D	208	11.7
E	80	16.6
F	90	53.0
G	114	4.3
H	136	33.2
I	45	1.5
J	92	18.1
K	285	33.1
L	568	27.1
M	47	6.0
N	166	8.8
O	74	8.8
P	55	8.8
Q	113	8.8
R	54	8.8
S	218	8.8
T	265	8.8

出典：2010年世界農林業センサス農業集落カード、及び2015年国勢調査。N集落からT集落は農林業センサスでは1つの集落として集計されているため、耕作放棄地率は同じ数値となる。

す。最終的な回帰モデルの適合度を示す各指標は、Cox-Snellの疑似決定係数 r^2 が0.27、Nagelkerke r^2 が0.36、Hosmer・Lemeshow検定の有意確率が0.46となった。

目的変数は、学生と協働的な祭事運営に肯定的な場合は1、否定的な場合は0とした点を踏まえて結果を考察する。

祭事継承方法の変化に対する意見に影響を及ぼす要因として、強い相関($p < .01$)が確認されたものは、端的に学生が祭事への参加者として、地元住民と遜色ない技量を有しているか否かという認識を示す2つの変数である。この結果は、祭事の要員としての力量に対するイメージが、地元住民の賛否意見と相関関係にあることを示している。つまりは、少なくとも被験者は「『力量問わず』地域外部の者は参加すべきではない」という固定観念に囚われていない可能性が推察される。

次いで、やや強い相関($p < .05$)が見られた要因として性別と行政職員・地域の役員らに対する相談のしやすさが選択された。前者からは、現在に至るまで本祭の中核的な担い手であった地元男性ほど否定的である傾向が示された。表2より、全体の半数強が学生の参加に否定的であり、祭事本体の役割を担う男性の方が女性よりも否定的であるという傾向は、先行集落を除き、これま

表8 ロジスティック回帰分析の結果
Table 8 The result of logistic regression analysis

変数名	係数	標準誤差	p 値	オッズ比	95% 信頼区間
定数	.30	2.27	.90	1.35	
性別ダミー（男性：1，女性：0）	-.47	.24	.047*	.63	.39 ~ .99
年代ダミー：49歳以下	.20	.30	.51	1.22	.68 ~ 2.17
年代ダミー：50歳代	.56	.31	.07	1.75	.96 ~ 3.18
年代ダミー：60歳代	(参照カテゴリー)				
年代ダミー：70歳以上	.18	.29	.55	1.19	.67 ~ 2.12
日常的な会話対象数（0～7）	-.25	.56	.65	.78	.26 ~ 2.31
日常の行動範囲ダミー：家～集落内	-1.12	1.68	.50	.33	.01 ~ 8.72
日常の行動範囲ダミー：～七尾市内	-.82	1.13	.47	.44	.05 ~ 4.06
日常の行動範囲ダミー：～石川県内	.07	.60	.90	1.07	.34 ~ 3.45
悩みを相談できる相手の有無ダミー：全くいない	-.02	.50	.98	.97	.37 ~ 2.61
悩みを相談できる相手の有無ダミー：身内にも身内以外にもいる	-.32	.23	.17	.73	.46 ~ 1.15
寄り合い参加頻度ダミー：1～2回/月	.19	.32	.56	1.21	.65 ~ 2.25
寄り合い参加頻度ダミー：1～2回/3ヶ月	.32	.27	.24	1.36	.81 ~ 2.34
寄り合い参加頻度ダミー：1～2回/年	(参照カテゴリー)				
寄り合い参加頻度ダミー：1～2回/数年・それ以下	.02	.38	.96	1.02	.49 ~ 2.15
異世代との会話頻度ダミー：とても頻繁にある	.08	.27	.78	1.08	.63 ~ 1.85
異世代との会話頻度ダミー：ない・分からない	.47	.33	.16	1.60	.83 ~ 3.07
相談・発言しやすさダミー：とても話しやすい	.36	.27	.18	1.43	.85 ~ 2.42
相談・発言しやすさダミー：あまり話しやすい雰囲気ではない	(参照カテゴリー)				
相談・発言しやすさダミー：全く話しやすい雰囲気ではない	-.55	.27	.04*	.58	.34 ~ .98
本祭への参加頻度ダミー：毎年必ず参加する	-.32	.32	.32	.72	.38 ~ 1.36
本祭への参加頻度ダミー：都合がつけば参加する	.01	.37	.98	1.01	.49 ~ 2.07
学生の技量に対する主観的評価ダミー：重宝するだろう	1.56	.24	.00**	4.76	2.97 ~ 7.63
学生の技量に対する主観的評価ダミー：余計に手がかかり、いない方がいい	-2.31	.77	.00**	.10	.02 ~ .45
仮に受け入れた場合の寄付可能金額ダミー：0～1,000円未満	-.47	.32	.14	.62	.33 ~ 1.17
仮に受け入れた場合の寄付可能金額ダミー：1,000円～3,000円未満	-.19	.29	.51	.83	.47 ~ 1.45
仮に受け入れた場合の寄付可能金額ダミー：3,000円～5,000円未満	.20	.27	.46	1.22	.72 ~ 2.10
仮に受け入れた場合の寄付可能金額ダミー：5,000円以上	(参照カテゴリー)				
集落人口（人）	-.00	.00	.10	1.00	1.00 ~ 1.00
集落の耕作放棄地率（%）	.02	.01	.05	1.00	1.00 ~ 1.05

注1) : n = 529, **は1%有意, *は5%有意を意味する。なお, 95%信頼区間はオッズ比の信頼区間である。

で地元大学生が担い手不足に対する具体的な要員として位置づけられてこなかった事実を裏付ける結果であろう。後者は、いわば平時にコミュニティの縦の繋がりが円滑でないと認識する人は、祭事に際しては学生らとの横の繋がりで維持していこうと考えない傾向を示している。この結果は、垂直型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルが連動している可能性を示すものである。

VI まとめ

本祭をはじめ、世界農業遺産や無形文化遺産として祭事の伝統的価値が見直される今日、改めてその継承のあり方が問われている。本研究では、これまで地元男性のみが担ってきた祭事に着目し、地域外部の学生との協働による継承の可能性を検討材料とした。

本稿で対象とした本祭（熊甲二十日祭）に関しては、これまでは一部の特定集落で草の根的に行われてきた学生との連携をさらに拡張し、多くの集落に「正規の担い

手」として位置づけるべきかが、当事者間でも論議されている。その議論に対して、客観的な現状認識の支援と情報提供を目的として、関係集落全戸アンケートを実施した。一部の設問で、抵抗回答に近い意味合いの選択肢が含まれるなど、統計分析上の厳密なバイアス除去には課題を残すが、それを踏まえたうえで、本分析によって得られた賛否意見の決定要因について、以下のように要約する。

第1に、地元大学生が本祭に参加し、担い手の一部として位置づけられていくことについての考え方は、学生の技量に対する評価と強く相関していた。先行集落から萌芽する大学生の参加実態（現状）が、周囲の地元住民からどのように見えているかという点が、地域住民にとって大学生の技量の基準となる。したがって、将来的に地元住民の意見を規定する重要な情報となりうる。

第2に、学生が本祭に参加することへの賛否の意見と、地元住民と行政や集落の役員らとの日常的な縦の繋がりに対する評価が相関していた。これは、地元大学生との連携に関する今後のあり方について即座に指針を示唆す

るものではないが、地域コミュニティの結束と祭事の継承に関する域外連携への意見との関係性について、さらに探索すべき課題を提示した。

第3に、賛否の意見と性別にも相関が確認された。本祭の中核を担ってきた男性に、学生との連携に否定的な意見がみられる傾向であったが、裏方として支援してきた女性にも一定程度の否定的な意見が見られ、学生の参加に対する捉え方は一枚岩ではない。この点についても、今後大学生らが先行集落以外の集落とも積極的に融合を図り、サポート役を含めて本祭への参加を計画する際には、まず踏まえるべき注意点である。

以上から、本研究の作業仮説の検証結果として、まず地域外部の若年層との協働・連携による祭事運営について、半数強の割合で否定的であった。しかし、固定観念としての否定ではなく、旧来の担い手を代替しうるかという点が規定要因として主であり、その技量が評価対象となっていた。この結果を端的に解釈するならば、地域外の若年層との融合によって新しい祭事の運営組織を創造していくことではなく、旧来の型を厳格に継承していくことが望まれていると考えられる。前述のように、祭事で求められる技量を学習し、それが地元住民に評価されることで、協働がより円滑に進むことが期待される。

他方で、単に不足する労働力の代替ではなく、祭事をきっかけに交流活動を展開する先行集落の取り組みが、新たな活力を創造するシナジー効果を持ちうるならば、現時点では否定的な意見が優勢である地元の意見が変化する可能性もある。

謝辞

本研究は、江頭ホスピタリティ事業振興財団研究開発助成及び前川報恩会地域振興助成、科研費（17H03890）の支援を受けて実施した成果である。調査に協力いただいた石川県七尾市中島町関係各位に深く謝意を申し上げる。

注

注1) FAOの正式な定義¹⁾によると、GIAHSとは、「コミュニティの環境及び持続可能な開発に対するニーズと志向とコミュニティの共適応により発展してきた世界的に重要な生物多様性に富む優れた土地利用及びランドスケープ」である。

注2) 学生の地域連携全般的な動向と問題点については、中塚・小田切²⁾などを参照されたい。

注3) 前掲の資料によると、長い歴史のなかで、9月20日に祭事が催されなかった例は、明治天皇崩御（1912年7月30日）の翌々月と、1916年に本地域にコレラが流行し、各集落で生活規制が行われた場合のみである。それ以外は、戦争で男性が戦地にかり出される中でも実施したという証言がある。

注4) 公式な資料としては残存していないが、調査過程で、当時を回顧した高齢者から、一部女性が参加して窮状をしのいだという記憶に基づく証言を得た。

注5) これらの慣行的な相互扶助の繋がりを、結（現地の方言で「エー」と発音）を呼ぶ。

注6) 研究過程で行った聞き取り調査（2016年9月、2017年3月）では、「外部の人材に頼るくらいなら神事だけ形式的に残し、祭事を辞めればよい」「先行集落の動きを全体で納得した意見と受け取られては困る」といった批判的な意見が出された。

注7) 後述の統計分析の際の処理を先んじて説明すると、当初は集落毎の人口減少割合（過去20年）も変数として考慮していた。しかしながら、多重共線性を確認した結果、他の変数との強い共線性が確認されたため、分析から除外した。

注8) 本研究での説明変数の値域や、後に示す目的変数の分布を考慮するならば、プロビットモデルによるパラメータの推計も検討すべきである可能性が認められるものの、ここでは有意確率やオッズ比など、結果の解釈を助ける指標が明示的なロジスティック回帰分析を採用した。

注9) 変数選択法を用いて説明変数を取捨選択するには、説明変数総数の約40倍のサンプル数が必要であるという既往研究の指摘¹³⁾に基づく。

引用文献

- 1) 農林水産省：世界農業遺産・日本農業遺産：世界農業遺産、〈http://www.maff.go.jp/j/nousin/kantai/giahs_1.html〉、2018年1月30日、2018年2月18日。
- 2) 石川県：世界農業遺産とは、「能登の里山里海」情報ポータル 〈<http://www.pref.ishikawa.jp/satoyama/noto-giahs/index.html>〉、2018年1月31日、2018年2月18日。
- 3) 中塚雅也・小田切徳美(2016)：大学地域連携の実態と課題、農村計画学会誌、35（1）、6-11。
- 4) 根岸亮太・後藤春彦・田口太郎（2007）：祭事が地域運営に与える影響に関する研究—埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として—、日本建築学会計画系論文集、72（622）、129-136。
- 5) 渋谷健太・後藤春彦・森田稔也・山崎義人（2017）：都市近郊における村落単位でみた農業基盤と祭事運営基盤の変容の関係—埼玉県三郷市を事例として—、都市計画論文集、52（3）、1177-1184。
- 6) 藤岡和佳（2000）：島の祭りと観光—伝統の継承に見る外部の取り込み過程—、日本文化環境論講座紀要、2、91-100。
- 7) 武田尚子（2005）：祭礼の変容と地域社会—福山市内海町の事例から—、武蔵社会学論集、2005（7）、191-216。
- 8) 政田将昭・水本恵一・堂下恵（2008）：外部者と地域住民との継続的交流による観光スタイルの提案—伝統祭事「キリコ祭」を事例として—、日本観光研究学会全国大会学術論文集、23、181-184。
- 9) 堂下恵（2008）：祭事への外部者参加を通じた体験型観光および地域活性化の検討、日本観光研究学会全国大会学術論文集、23、333-336。
- 10) 卯田卓矢・阿部依子（2015）：過疎地域における祭礼の存

続形態—佐久市望月地域の榊祭りを事例として—, 地域研究
年報, 37, 33-59.

- 11) 七尾市教育委員会 編 (2012): 『お熊甲祭 国指定重要無形
民俗文化財熊甲二十日祭の杵旗行事』, 北國新聞社出版局,
金沢.

- 12) 加賀淳一 (2016): 能登の里山里海を守る! —七尾市中島
町小牧集落の現場から—, 農土石川, 54, 37-39.

- 13) Cohen, J. & Cohen, P. (1984): *Applied Multiple Regression/
Correlation Analysis for the Behavioral Sciences (2nd Edition)*,
Psychology Press, London.

Summary: This study examined how traditional festivals are inherited. The festival reviewed here is traditionally conducted only by locals, but some residents have begun to consider cooperating with outsiders (particularly university students) because of scarcity of labor. There is no consensus on the subject. This study investigated residents' opinion on cooperating with university students using a questionnaire survey of all households in settlements participating in the festival. Consequently, it was found that following three factors were correlated with the view to collaboration with students. One was an impression that students would be helpful in conducting the festival promoted natural collaboration. Another was the individual cognition of ease to contact with administrative staff and regional leaders. The other was gender.

キーワード (Keywords): 熊甲二十日祭 (Kumakabuto Hatsuka Matsuri), 大学生 (University Students), ロジスティック回帰分
析 (Logistic regression analysis)

(2018年 3 月20日 原稿受理)

(2018年12月26日 採用決定)